
MOON-4 夜叉 3 < 2 3 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 3 < 2 3 >

【Nコード】

N2047N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

桜と榊に襲われた裕希は和人の『記憶』の中に落ちる。それを救ったのは……

MOONシリーズ第4弾 夜叉 4話目です。

4・夜叉 - 3 (前書き)

夏。。。次の原稿考えなきゃ。

4・夜叉 - 3

「そう言う事。」

ガードレールの上に立ち尽くす裕希に、桜は言った。「じゃ、今、九桜は何処にいるの。」

「・・・・・・・・」

裕希は頭の中がぼんやりとして、はつきりしない。ただ、桜の声だけが頭の中を響き渡る・・・

「言いなさい、篠原裕希。」

桜はもう一度、裕希の額に右手の人差指を当てた。

「九桜は・・・」

裕希は言った。「『桜の樹の下にいる』。」

「そう。」

桜は微笑んだ。「面白い事言うわね。」

そう言い、「あなたはもういない。」

少女は裕希の体を押した。

「・・・・・・・・」

裕希の体が・・・都庁広場の闇に向かって落ちる。

「え・・・・・・・・」

そこで裕希は『現実』に戻った。

暗い闇に向けて落ちる・・・・・・

（駄目だ！）

固く目を閉じた瞬間。

スッ・・・・・・・・

『誰か』が裕希を中空で救いあげた。

「！・・・・・・・・」

その腕の中で裕希は彼女の顔を振り仰いだ。

凜とした表情とたなびく黒髪。

そして、その頭上には2本の角。

「誰!?!」

(『闇』の者!?!)

そんな裕希の表情を読み取ったかの様に、

「案ずるでない。」

芯の通った声。「人の子よ。」

「誰!」

ガードレールの上空高く超え、再び地上に降り立った彼女たちの姿を見て、

「邪魔者!」

桜は両手を広げた。

桜の花びらが一斉に裕希と彼女を襲う。

「甘いよ。」

幻影に惑わされる事なく、白い着物姿の女性は、裕希を地上に置き腰から剣を抜き取ると、

ザッ ザッ ザッ・・・

闇に集う紅の瞳を次々と切り倒した。

「ふ・・・」

艶やかに微笑み、剣を眼前にかかげる。

榊は早坂の銃を彼女に向けて、

ガンッ ガンッ ガンッ

放つが、

キンッ キンッ キンッ

難なく女性はその剣で弾丸を跳ね返した。

「『銀』を。」

黒いスーツ姿の榊は拳銃を彼女の眉間に向けたまま、「跳ね返した、剣で。」

裕希は降ろされたガードレールの脇で彼らの闘いを見ていた。

（『闇』の者なのに・・・・・・？）

女性は剣を構えたまま告げた。

「今すぐ、この場から離れよ、桜。」

鋭い眼差しと声だった。

桜は中空に浮かんだまま、かざされたその剣をじっと見つめ、

「『龍王』の剣。」

呟いた。

腰の鞘には蒔絵に銀の龍が施されている。

桜のその声が少し震えている。

「お前は・・・。」

「我が名は夜叉。」

キンッ・・・・・・

月明かりを剣で反射させ、彼女は言った。

「我が名は夜叉・・・未来永劫『帝王』の御側に侍る者。」

そして、疾風の早さで桜の元へと飛び込む。

同時に、榊も桜の元へ飛翔していた。

天空で絡み合う、3つの影。

月明かりが・・・薄黒い雲に閉ざされた。

「榊！」

桜は叫んだ。

「大丈夫、お嬢。」

右手で榊は夜叉と名乗る女性の剣を受けていた。
その手のひらから血が滲む。

「夜叉……」

桜が目を細めて彼女を見つめる。「あなたがあの『夜叉』か。『帝王』の側に1000年以上侍するという。」

「そうじゃ。」

榊が流す血を妖しい瞳で見つめながら、

「我は帝王が呼びになられた時しか『現世』に姿を現さぬ……それも、1000年に1度だけ。」

「……」

桜は静かに榊が握る剣に手をかけた。

すっ……

剣が………銀色に光った。

「……」

夜叉は無言だった。

「刀をひくがいい、夜叉。」

桜は大人びた口調で言った。

「……」

夜叉は何も言わず、刀をひいた。

「何しに来たのよ。」

そしてふいにいつもの口調に戻り、「帝王はもういないわ。あなたの出る幕なんてないわよ。」

「これは帝王の命。」

と、眼下の裕希に視線を戻し、「あの子を守るのが今の私の役目。」

「あんな人間の子なんてどうでもいいじゃない！」

少女は彼女を睨みつけ、「もとはと言えばあなたたち『鬼』も『帝王』に葬られた一族でしょ？なのに、何故、1000年経った今でも帝王に仕えるというのよ。」

桜は右手を上げた。その手に、紅の炎が宿る。

「やめろ、お嬢！」

榊がそれを制した。「『今は』まだ夜叉を相手にする時じゃない。相手は夜叉だ、一筋縄ではいかない。」

「ほほほ………」

夜叉は口到手をあて高らかに笑った。

「よく存じておるではないか、榊とやら。さすが狼男一族の末裔。」

「お褒め頂き光栄。」

榊は彼女から視線を離さずに答えた。「だが、この借りは必ず返させてもらう。」

「そうよ、そうよ！」

桜が叫ぶ。「夜叉なんか知らない！どっか行っちゃえ！」

「ふ………」

夜叉は目を細めた。頭上の角が再び雲の合間から差し出した月光に煌めく。「我が本当の力を現わすのは我が君、帝王に何かあった時……それだけは、覚えておくがいい、桜。」

「私、物忘れひどいの。」

桜はそっぽを向いた。少し、小首を傾げ、

「でも、今夜はいい話を聞いちゃったわ。あなたの事はどうでもいいけど」

そして、榊に視線を移し、「帰りましょう、陽が上がるわ。お肌によくないし。秀も心配だわ。」

いつもの桜だった。「明日は渋谷でお買い物よ、榊は御留守番だけれどね、秀がいるから。」

「ああ。」

榊は答えた。「そういう事だ、夜叉。」

「いずれ」

夜叉は剣を一振りし、胸から取り出した懐紙でその血を拭いた。

「闘わねばならぬ運命。今のうちに『現世』を楽しんでおくがいい。」

「それはお互い様。」

桜の花びらが周囲を取り巻いた。「あなたもあまり帝王に侍りすぎないようにね。」

その花卉の中から、桜の声だけが聞こえて来た。

再び、夜風が吹いた時にはもう2人の姿はなかった。

天空の星と地上の星が彼方の闇で交錯するだけだった。

4・夜叉 - 3 (後書き)

お読み下さりありがとうございましたvv

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047n/>

MOON-4 夜叉 3 < 2 3 >

2010年10月10日20時01分発行